

# 男は 痛い !

國友万裕

第3回

ノルウェーの森

## 1. 僕の本モエロス歴

最近、ある先生にしつこく頼んでいる。「俺を男にしてください」と……。

断わっておくけど、僕はゲイじゃない。男の人とそこまでの関係になったことは一度もない。でも女性恐怖なので、女性ともほとんどつきあってこなかったし、本モエロスな感情を男の人に抱いたことは何度もある。

不登校で、3年くらい引きこもった後、僕は大学に入るために予備校に通った。予備校とは言っても小さな塾みたいところで、入学する学生はわずか40人くらい。しかも、どんどん抜けていくので、最終的には20人足らずの人数になってしまったと記憶している。大手の大学に入ろうと思っている奴は、もっと有名な予備校に行こうとする。僕はそれまでが学校にも行けず、勉強もしていなかったので、大手の予備校に通う自信はなかった。

幸いなことに、中学時代に一緒だった子、すなわち、僕の過去を知っている子は、この塾には一人もいなかった。熊本市の中心地にある塾なのだが、国鉄の駅が近かったせいもあって、熊本市の外の田舎の学生たちが主だった。

そこで毎日、顔を見ていた男の子に僕は明らかに恋をしていた。結局、1回として話もできなかったのだけど、彼を見ているだけで励まされた。彼と同じ学校に通っているのが楽しくて、ほとんど休まずに学校に通った。

高校は東京だったらしい。親が急に熊本に転勤することになって、それで熊本で浪人生活をするようになったみたいだった。結局、

彼は熊本の小さな私立大学に行くことになって、もう思えば、30年近く会っていない。もう会う術もないだろう。彼も僕のことなんかどうに忘れてるに違いない。

京都の大学に入って、そこでも好きな男の子はできた。彼には積極的に何度もトライした。狂おしいくらいの熱愛だった。ストーキングまでしていた。彼は、僕を疎ましく思いながらも情にほだされて、3回生くらいの頃には、どうにか飯くらいは一緒に食べてくれる仲になってくれた。彼は大学の付属校からエスカレーター式に大学まで来た人で、体育会系だった。僕が彼にホモセクシャルな感情を抱いていることにも気づいていたが、それでも付き合ってくれた。思えば、彼とももう25年会っていないなあ。四半世紀だ。

僕は基本的におっとりしたやつが好きだ。これまで好きになった男の人は、大抵、お坊ちゃんタイプであり、ひねくれていない、貧しさを感じないタイプだ。これは、類は友を呼ぶということなのかもしれない。僕自身も、お坊ちゃんタイプだ、素直だ、ナイーブだ、垢が付いていないと言われる。

前にどういう自分になりたいかという心理テストを受けたことがあるのだが、僕は自分を少しスライドさせた自分になりたいのだという結果がでた。まったく違う自分になりたいというのではなく、自分と似ていて、でも少し違う人。似て非なる人というところだろうか。そして、僕はそういう男性に恋してしまうのだ。

おそらく、僕は10歳の時点で、男としての成長が止まってしまっている。10歳くらいから男らしさ恐怖症になってしまった僕は、自分が男であることを受け入れることがずっと

できなかった。そのことで、僕は、普通の連中が、男同士で楽しくやっている中学・高校のときに、友達もできず、欲しいとも思わず、自分の殻に引きこもっていったのだ。

思えば、入った中学が僕にはあっていなかった。家の近所の公立中学だったのだが、市内でも一番柄が悪いとされていた中学である。周りは不良っぽいやつばかりで、先生のほうも、生徒を威圧できるような先生でないとやっていかれない。まるで少年院のような雰囲気だった。

そのなかにあって、気が小さくて、苛められっ子の僕は自分が同一化できる男子が見つからなかったのである。僕は次第に自分の殻にこもり、小説や映画の世界に出てくる男性たちに恋をするようになっていた。生身の友達はいらなかったのだ。

18歳の時に予備校時代の彼と出会って、「生身の友達が欲しい」願望が大きく刺激された。コペルニクス的な僕の心の大激変だった。しかし、10代、20代と友達は一向にできなかった。僕は、不登校になったことで、間違っただストーリーを生きてしまったのだ。不登校の子が珍しくなくなってきたのは、比較的最近のことである。今では大検に合格したとかフリースクールを出た子は多くいるし、そういう子の存在が認知されているが、僕が20代の頃までは、よほど変わったやつと見なされていて、そんな過去を知ったら、周りの連中は引いてしまう。日本人は集団主義。自分と同じストーリーを生きてきた人間でなければ、心を開こうとしない。違ったストーリーを生きてきた僕は、自分の過去に触れられるのを恐れて、極力誰とも付き合わずに20代を生きた。

30 になって、自分の人生を見つめなおさざるを得ない出来事が起きた。僕は、心療内科に通い始め、カウンセラーの先生たちにも、「どうしても男の友達が欲しいのだ。とってもし仲のいい友達が……」と話していた。34 歳で、メンズリブ(男性解放運動)に参加した。しかし、そこで出会った男性たちは僕のイメージしていた男性とは違っていった。一向に男友達はできなかった。

友達をつくることはほとんど諦めかけていた僕に、突然神様が贈り物をくれたのは 37 歳だった。36 歳でメンズリブの幹部の男性と確執を起こし、グループから締め出された頃だった。まさに捨てる神あれば、拾う神あり。しかも、それまで求めていたような男性が僕の前に現れた。一流大学の付属高校から大学へと進んだ人だから、おっとりしたお坊ちゃんタイプ。僕と波長はピッタリだった。普段は仕事で一緒になるわけでもないのに、最初のメール交換から交際は着々と進んでいき、男同士のエロティックな関係も味わってきた。会うと必ず、大阪のスパワールド。2 人で風呂に入り、プールに入り、飯を食い、マッサージを受けたりして、たっぷり 3、4 時間過ごす。そういう付き合いがもう 10 年以上続いている。彼とは他のところでも一緒に風呂に入っているの、もう何 10 回もお互いの裸を見ていることになる(笑)。

それから、以前、同じスポーツクラブに通っていて、今は東京に行ってしまった 30 過ぎの友達とも、彼が京都にいた頃は、二人に汗をかいた後、クラブの風呂に一緒に入ったものだ。それと東京に移って行かれた鍼灸の先生とも東京の銭湯で風呂に行った。

また大学の先生で、僕を可愛がってくれる

先生も徐々に始まった。教え子の男の子たちのなかにも慕ってくれる男の子はいる。そんなわけで、今は男に不自由していない(！?)。僕の悩みを受け止めてくれる男の人は大勢いるからだ。

僕は男の人が好きになると、その人と一体になりたいと思う。予備校の頃の彼の時は、彼が勉強しているんだから、俺も勉強しなきゃと思って、勉強したものだ。大学の頃の彼は体育会だったから、俺もスポーツができるようにならなきゃと思って、3 回生の頃からプールに通い始めた。僕は、男性とセックスをしたいとは思わないけど、男の人の体にそられることはあって、でも、一緒に風呂に入ると、その欲望は解消される。お互いの裸を見せ合うと男の友情は深まる。俺たちは、男同士なんだという気持ちになって、いつの間にか、恋が友情に変わっている。

いま、ある男性を口説いているのは、その人は、これまで付き合ってきた男友達と違って、ジェンダーやセクシュアリティの勉強をしていて、その部分で、僕のことを理解してくれているからだ。ジェンダーの抱え込みは普通の人にはなかなかピンと来ないので、他の男友達にはその部分だけは打ち明けられない。しかし、その人だったら、理解してくれるから、その人に友達になってもらえれば、俺もいよいよ一人前の男になれるという思いがあるからだ。

上手くいけば、女性とも交際できるようになるかもしれない。

## 2 . 男はみんな、男が好きだ！

男が男を好きになるという感情は決して、

異常なものではない。

村上春樹原作の映画『ノルウェイの森』も、最初に、高校時代のキヅキ（高良健吾）と主人公ワタナベ（松山ケンイチ）がフェンシングのような遊びをしていて、それを直子（菊池凜子）が真ん中で見ているところから始まっている。すなわち、最初に向かいあい、見つめあっているのは、男2人である。この後、直子とキヅキは幼なじみで、恋人同士だということが語られる。さらに男2人が並んで下校する様子、ビリヤード場に遊びに行く様子が描かれ、それに並行してプールで泳ぐキヅキ、彼の濡れた背中に身体をよせる直子の仲が描かれていく。とても幸せそうな高校生3人に見えるのに、ある時、突然、何の前触れもなく、キヅキが自殺してしまう。それがこの物語の発端である。

その後は、大学生となって東京に出てきたワタナベと心を病んで田舎の療養所に入院している直子の関係が描かれていくのだが、キヅキがすべての始まりとなっていることはきわめて示唆的と言っていいだろう。フロイトのエデッス・コンプレックスでは、父殺しが、男子が女性との恋愛関係に入る前の成長のステップとなるわけだが、ここではキヅキという友人が死んでいなくなることが、主人公たちの大きな出発点となるのである。

キヅキが何故自ら死を選んだのか？ そのことについては詳しくは語られない。しかし、語る必要もないのかもしれない。僕が目撃したいのは、ワタナベは最初、キヅキのほうと親しくて、キヅキの彼女だからということもあって、直子とつきあうことになることである。

### 3．裸になるのは、男らしさの証明！？

僕は、中学くらいの頃、身体の性と心の性の違和感に悩んでいた。

僕は、4年生くらいまでは女の子の前で裸になることも、母親と一緒に風呂に入ることもまったく平気だった。

今でも思い出すのは、3年生の夏の頃だ。あの当時までは曲がりなりに男の子だった僕は、プールの時間が終わると、仲良しのユキちゃんと教室まで走ったものだった。当時、男子たちは、プールの時、おちんちんを隠さずに着替えすることを「むちん」と言っていた。女の子が教室にいと、腰巻きをして海水パンツを脱がなきゃいけない。「女子が戻ってくる前に、教室に戻って、むちんしようぜ」と、男の子同士で廊下を走るのが楽しかったものだ。思えば、あの頃は一番幸せな時期だった。

それが5年生くらいになって思春期になると、僕は男らしさに疑問を持ち始め、男の友達は少なくなり、身体を見られることを極端にいやがるようになっていった。とりわけ嫌だったのは、夏場の身体測定のときた。前々号にも書いたが当時の担任の女の先生は、マッチョ好きで、男子に男らしさを強いる人だった。毎月、身体測定があるのだが、この先生は、女子には何も言わないのに、男子には、夏場なんだから、教室で上半身裸になって、保健室まで歩いていけというのだ。

僕はこれが死ぬほど嫌だった。同じ裸になるのでも、プールとはモードが違っているからである。プールは、上半身裸が規範だけど、必然性のないシチュエーションでの裸は男らしさの誇示なのである。しかし、他の男子は

平気みたいだ。やはり俺は異常なのか……？

男が裸になることを恥ずかしがるのが、決して異常な感情ではないことに気づいたのは、大人になってからのことだった。10年ほど前に、男性問題の分科会に参加したのだが、そこで、当時40くらいだった男性が、次のように語っていたことを記憶している。

「高校の健康診断の時に、保健室で体重をはかった後、上半身裸のままレントゲン車まで行けて言われて、ほんのちょっとの距離だったんだけど、女子たちとすれ違ったんです。今だから言えるけど、あの時は、やはり恥ずかしかったんですね。男だから、恥ずかしがっちゃいけないって思っていたんだけど……」

また何年か前にある男子学生からジェンダーについてあれこれ質問を受けた。彼は、どうみてもマッチョ系だから、男尊女卑的なことを言うのかと思っていたら、そうではなかった。いろいろなことに問題意識を持っているみたいだったのだが、その1つは、やはり羞恥心の問題だった。

「プールの時間、僕の行っていた学校では、男子は廊下で着替えさせられるんですよ。女子はちゃんと着替える場所があるのに、皆、ブーブー言っているんです」

女子の更衣室をつくるんだったら、男子もつくって然るべきなんだけど、おそらく予算の関係なのか。なぜか、今でもプールの更衣室は女子のみというところが多いみたいである。この頃は、男子だけを特別扱いしたら問題になるのだけども、女子を特別に扱うことは依然として問題にされない。

そうそう、10年ほど前だ。新聞に、「体育

祭の棒倒しを男子全員上半身裸でやらされて、それを女の子たちが楽しそうに見ているのが恥ずかしい」という男子高校生の投書がのった。それに対して、「男は人前で肌をさらすことが許されているのに、今は男が細かいことを気にするようになった。男が弱くなったと言われても仕方がないだろう」という女性読者からの投稿が出たと記憶している。

「本当に女ってやつは、困ったもんだなあ」と思ったものだった。女が差別されると怒るくせに、男を差別していることにはまったく気がついていない。「女性は羞恥心をもつことが許されているのに、男性は許されないのだ」と解釈せず、「男は肌をさらすことが許されているのに、女は許されていない」と解釈してしまうのである。

もちろん、僕も男同士で風呂に入るのは好きだし、男同士で裸になるのは楽しい時もある。しかし、自分が好きで裸になるのと、学校の先生から強制されるのでは別問題である。ジェンダーはセックスと一緒だ。好きな相手とセックスするのと、嫌いな相手から無理矢理レイプされるのでは、同じセックスでもまったく意味が違ってくる。

肌をさらすことを強いられることは一つの男性問題である。僕は裸を女子に見られるのが恥ずかしいと思う性格だったから、俺は男じゃないんじゃないかと思いだめたのだった。同一性障害である。どうにか治さなきゃいけない。

僕が大学の頃、スポーツを始めるのにプールを選んだのも、プールだと、自分の上半身を露出するということになるから、そうしていくうちに男になれるのではないかという思いがあったからだった。公の場で、乳首を露

出するのは（笑）男らしさの証明である。

そんなわけで、僕のプール歴は、もう27年に及ぶ。プールで裸になることにはすっかりなれたので、今では普通の男性よりも、肌をさらすことに抵抗はないと思うが、だから男らしくなれたかという別問題だ。

僕が男らしさ恐怖症に陥った大きな原因は、女の先生から「男らしさ教育」を受けたせいである。その先生に悪気はなかったのだが、僕には、「男子を女に都合のいい男に教育しようとしている」女性教師にしか見えなかった。これでは、女から男へのセクハラである。やはり、男らしくなるためには男性の力が必要だ。僕は男の友達が増えるに連れて、相手から男の部分も吸収して、男になっていくんだなあと思っている。いろいろな男性と同一化することで、少しずつ、自分の男としてのアイデンティティが築かれていくのである。おかげさまで、男の友人は増えたので、もう一息で、俺だって男になれる。今、先生を口説いているのも、その先生が最後のステップだという予感があるからである。

僕はもう48だし、50代くらいは、「俺は男だ」という確信を持って生きていきたい。「あと2年の間に男にしてくださいね」と僕はその先生に懇願しているのである（笑）

#### 4. 男は構築されるもの

『ノルウェイの森』で面白いのは、女性との恋愛と男らしさの構築の場面がほとんど交互に現れるということである。

ワタナベは直子とセックスをする仲になりながらも、同じ大学の緑（水原希子）とも交際し始めるのだが、直子や緑との交際のシー

ンの後、ワタナベがプールで泳いでいる場面、あるいはバイトで力仕事をしている場面が挿入される。また長沢さん（玉山鉄二）という先輩の男性との交際の場面も挟まれる。

これは男が女と交際するためには、その一方で、男らしさを構築することが不可欠であることを示している。これは、バダンテール、渡辺恒夫、ギルモアなど、さまざまな学者が言っていることなのだが、男であることは女であることよりも不安定なのである。男は元々染色体の関係で女よりも弱い。男として生まれた時点で、男は負け組だという言う人もいる。

したがって、男は常に、自分の男らしさを確認していなくてはならない。僕は、不幸なことに、10歳でジェンダーの問題に目覚めてしまったため、それを意識せざるを得なかった。しかし、そのことを知っている人が世の中にどれだけいるだろうか。女性はもちろん分からないだろうし、男性でも、男性ジェンダーを受け入れていくことに苦労しなかった人は、男のアイデンティティが女よりも不確かだということを意識していない。実際には、男が男らしいことをしようとするのは、男のアイデンティティを立て直す欲求が深層心理にあるからなのだけど、そのことを普通の男性は気づいていないのである。男性学や男性運動がいつまでも広がっていかないのはそのせいだ。男のほうが性のアイデンティティが弱いということを、まずはわかってもらわなくてはならない。

ワタナベは友達を作りたくないという学生で、言ってみれば、引きこもりである。僕もこの心理はすごくわかる。僕などは、男の友達が欲しいと思う反面、男の友達ができると

心が乱れるという思いがあった。僕は自尊心が低いので、周りの男子たちのほうが遥かに幸せそうに見えたし、自分の劣等感を刺激される。それが怖かったのだ。僕が40くらいになって、やっと友達ができるようになったのは、ようやく僕が、それまでの長い遅れを取り戻してきたからである。

ワタナベを演じる松山ケンイチは少年のようなあどけない顔で、この役を演じるのは彼以外には考えられない。また映画全体の澄みわたったような雰囲気にも注目してほしい。この映画はプールの水や山の雪が美しく描かれ、冷たい触感がある。それは男っぽい汗や臭いがしない世界であり、それが松山のキャラクターにもぴったりはまっている。これから男になっていく、さなぎのような持ち味が彼にはあるからだ。『ウルトラミラクルラブストーリー』(2009)で、彼が演じたのはアスペルガーの青年役だが、アスペルガーや不登校も男が8割だということを、世間の人は知っているだろうか。

松山ケンイチは、今やすっかり売れっ子で、日本の若手男優の代表的存在になりつつあるけども、これは彼が、アスペルガーの役を演じて、じっくりくるキャラの持ち主だからである。現代の男性問題を訴えるのに、もっともふさわしい男優と言えるかもしれないのだ。

## 5. 女性とのディタッチメント(分離)

『ノルウェイの森』では、ワタナベの女性体験に必ず他の男が関わってくる。まず、直子との関係にはキヅキが関わっている。2人はセックスの最中でも、死んだキヅキのこと

を思い出している。緑との関係にしてもそうだ。「私、彼氏がいるの」と緑。「何となくいると思っていた」と言うワタナベ。

この映画で描かれる恋愛は、基本的に三角関係なのである。これも、男の立場から考えた場合は、同一化の問題である。ワタナベは、他の男性と同一化しつつ、女性と付き合っている。他の男性と女性を共有しているということになる。

「お前もつらかったんだろうけど、お前が直子を残して死んでいったから、俺だって苦しいんだ」と死んだキヅキに語りかけるワタナベのモノログ。しかし、ワタナベがなぜ、ここまで直子にこだわるのか。彼女は、単なる友達の彼女だった人に過ぎない。なのに、彼は彼女を愛し抜こうと努力する。これはとりもなおさず、彼がキヅキに同一化の欲望を抱いていて、キヅキを内面化するには、直子との愛を貫く手段しかないからである。直子を知れば知るほど、キヅキにも近づいていくとワタナベは思っている。直子を求めることでキヅキを求めるといふ、欲望の三角形がここに存在するのである。

村上春樹の小説について研究された本を読んでいると、「ディタッチメント(分離)」という言葉がしばしば出てくる。

ワタナベと直子や緑との関係には、彼女たちが他の男にもとらわれているとせいである種の距離感が生まれる。さらに、ワタナベ自身も、直子と緑、両方とつきあっているのに、ここにも距離感が生まれる。この映画で描かれるのは、男1人と女1人がべったり愛し合うような関係ではないのである。

緑との交際の場面で、緑とワタナベは雪の中を歩いていくが、2人は腕を組むわけでも、

手をつなぐわけでもなく、離れて平行に歩いていく。これが、この映画の男女関係を象徴する場面である。分離しながらも、女を愛す……それが、この映画のテーマであると思えるのだ。

僕が大学に入って1週間くらいたった頃だ。朝の大教室。僕は一人で座っていた。教室は閑散としていて、僕はそこで授業が始まるのを待っていた。すると、突然、右側から声が聞こえた。女子学生が立っていた。

「ねえ、通てんの？」と彼女。

「いや、下宿です」と僕は、なんだ！？この女は??と思いながら答えた。

「どこから来てんの？」

「九州です」

「九州のどこ？」とさらに彼女はプライバシーに踏み込んでくる。

「熊本市……」

「そんな感じー」と彼女は予想があたったという顔で言った。

だけど、僕は不愉快だった。一体、俺のどこが「熊本」なんだ？ 後になって、この彼女が、同じクラスの女の子だということがわかった。しかし、この時点で僕は、まだ彼女の顔も名前も記憶していなかったのだ。彼女は、僕のプライバシーを探っていたのだろうか。

僕が女性を怖いと感じるのはこういう時だ。女性と付き合っていると、女性のペースに巻き込まれるような気持ちになってくる。女性のほうが親密さへの敷居が低いし、他人のプライバシーを詮索したがるからである。

これを回避するためには、ある程度、女性とは距離をおいて付き合わなくてはならないと僕は思っている。とりわけ、僕みたいに男

としてのアイデンティティに自信のない男は、女性と近くなり過ぎると、自分の男の部分が脅かされるような気持ちになってくる。女は男を去勢するのである。

おそらく、ワタナベも、まだ男としてのアイデンティティに自信がないのではないか？ だから一人の女性に深入りすることを躊躇しているようにも思えるのだ。

## 6 . 一人の女性と付き合うために。

ワタナベの先輩の松村は初美（初音映莉子）という恋人がいる。外務省に就職が決まり、海外に赴任されることになった松村に、初美のことはどうするのかと尋ねるワタナベ。これに対し、松村は、「俺は結婚はしない。俺が海外に行く間、他の男と付き合うか、俺を待つかは、俺の問題じゃない。彼女の問題だ」と語る。松村は、たくさんの女たちと関係をもった経験のある男である。一方の初美はそれを知りながらも、松村への愛を捨てることができない。

初美は、3人で会食した際に、ワタナベが他に好きな女性がいながら、松村と一緒に女の子を取り替えて遊んだことがあると聞いて、ワタナベに激しく詰め寄る。「あなたは、そういうタイプの人じゃないと思うけど」と。「僕もそう思います」とワタナベ。初美の言うように、ワタナベは、松村のように遊びで、たくさんの女性とセックスをするような男ではない。しかし、ワタナベには、一人の人を愛し抜けるという確信も持てないのである。

「あなたみたいに確信をもって人を愛せるってすごいなあ」とワタナベは語る。しかし、初美は、この数年後に自殺したという設定に

なっている。やはり、確信をもって人を愛することは不可能だったのだろうか。

とりわけ、男の場合は、これまで述べてきたような同一化の問題が絡んでくるので、余計、女性を愛するまでの段階にたどり着くステップがややこしくなる。僕が女性を受け入れられないのも、この年になってお恥ずかしいけど、やはり、男としてのアイデンティティが未熟だからだ。男性との関係の方が楽しいと思うのは、男の人は、僕の男のアイデンティティを高めてくれるからだ。しかし、女はそれを侵食しようとするのである。

男の友達は何人いてもかまわない。僕が何人の男と付き合おうが、そのことで他の男の人との関係がくずれないわけじゃない。しかし、女性だとそうはいかないだろう。また女性の場合は、往々にして、一人の男を所有しようとするし、一人の男に依存しようとするので、それを疎ましいと僕は感じてしまうのである。

映画では、この後、直子が自殺し、直子と同じ療養施設に入院していたレイコ（霧島レイカ）がワタナベの元を訪れて、レイコの誘いで、2人はセックスをすることになる。彼女は自分のなかに直子を内面化するために、ワタナベとセックスすべきだと考えるのだ。「直子や私の分も幸せになってね」と彼女は去っていく。

その後すぐにワタナベは緑に電話をする。すなわち、ワタナベが緑と真面目に恋愛しようとする決意にいたったことを示唆して、映画は終わっていく。

この映画、死と女がテーマだ。僕の感想は、それを強引に男の自己構築の問題にこじつけたものと思う人もいるかもしれない。しかし、男にとって死イコール女であることを忘れち

やいけない。これは世界的に有名なフェミニストのシクスーも言っていることだし、シェールがオスカーをとった『月の輝く夜に』（1987）という映画を覚えていらっしゃるだろうか。あの映画で、イタリア系アメリカ移民の母が、夫の浮気に疲れて、ある男に尋ねる。

「なぜ、男は女を追うの？」

「さあ、死が怖いからかも」

「ありがとう。私の質問に答えてくれて」

そう、男にとって女は、死が怖いものと同じくらいに怖い。だから、ある種の男性は、常に女性（死）とセックスしていなければ、その恐怖から逃れられないのである。僕は、その逆パターンで、女が怖くて、まともに付き合うこともできない。ワタナベは、様々な葛藤を経て、どうにか女性との恋愛にたどり着いたみたいだ。俺も、こういう日が来るのかなあー。50 近くにもなって、何を言っているんだ？ と言われるかもしれないが、キヅキや直子が死を選んだのと同じで、心の病気はなかなか治らないのだ。

そして、同一化の問題に関して言えば、女よりも男のほうがはるかに苦労するということ。そのことを世間の人に分かって欲しいよね。

本当に男って、痛い！ よね。